

日本語における色彩語の考察：認知言語学の視点から

研究代表者 芸術学部 基礎教育 准教授 松中 義大

本研究は、色と言語の関係についての考察を目的とするものである。我々が視覚でとらえた色について、他の人にその情報を伝達しようとする時(多様な科学技術や、色彩についての専門知識に頼らない時)、一般的にはその人の持つ色彩語彙(赤、青、blue、blanc、など)が用いられる。この研究では、きわめて基本的な認知・認識プロセスである色の知覚がどのように我々の概念形成や言語と関わるのかを認知言語学の観点から解明を試みる。さらに、日本語では「灰色の人生」「黄色い歓声」などのように色彩がいわば比喩的に意味拡張している例が見られ、また、「この問題に白黒をつける」のように色彩が我々の道徳・倫理的価値観と結びついている例も見られる。こうした意味拡張のメカニズムについて解明することを目指すものである。本年度の研究成果は以下の2点である。

1. 日本人(特にメディア芸術系学生)の色彩語彙の特徴

基礎的研究として、また、本学の教育、研究・制作に資するという観点から、日本語の色彩語彙について本学芸術学部生にどのような特徴があるか、について調査を実施した。なお、詳細については、芸術学部紀要『芸術世界』第24号に論文を掲載予定である。

東京工芸大学芸術学部生で、筆者が開講している基礎教育系科目の受講者のうち、調査への参加に同意した学生を対象とし、人数は198名(年齢18～25歳、男:115名、女:83名)であった。調査方法は、調査用紙を渡し、「思いつく限りなるべくたくさん色の名前を書き出して下さい」と指示を与え、記入させた。その際、調査環境の違いによる影響を極力排除するため、周囲の環境を見回して色を探すことはしないよう注意を与えた。制限時間は5分とした。

結果として、回答者が想起した色彩語彙は合計で346語だった。これは先行研究の一般日本人を対象とした同様な調査と比べると多い数になっており、総体として、本調査での回答者群は色に対する興味・関心

が多様であることが伺える。表1に本調査で想起された色彩語彙の上位20位までを示す。

順位	色名	回答数	想起率
1	黄	194	97.98
2	赤	193	97.47
3	黒	190	95.96
4	青	189	95.45
5	白	189	95.45
6	紫	186	93.94
7	緑	184	92.93
8	茶	170	85.86
9	水	156	78.79
10	黄緑	144	72.73
11	灰	132	66.67
12	オレンジ	125	63.13
13	ピンク	124	62.63
14	金	120	60.61
15	銀	120	60.61
16	肌	108	54.55
17	橙	95	47.98
18	藍	87	43.94
19	黄土	86	43.43
20	朱	82	41.41

表1 上位20位までの想起された語彙

先行研究では、一般日本人ではほぼ同じような上位で構成される一方、日本画・洋画専攻学生では異なる語彙が上位に並ぶことが示されており、今回の調査では本学芸術学部生は一般日本人とほぼ同じ傾向を持つことが分かった。また、いわゆる基本色彩語彙理論で提起されている基本色彩語と合致する結果になっているが、日本人の特徴でもある黄緑、水色が基本色彩語になっていることも本調査の結果でも示されている。

2. 抽象概念と色との関連

認知言語学では、言語の意味はすべてが恣意的に決定されるのではなく、身体的・経験的基盤に根ざすものであるという立場を取る。たとえ抽象的な概念(とそれを表す言語)であっても、より具体的な経験などを基盤として、メタファー(隠喩)などによって推論することで理解し、体得していると考える。例えば、

時間に関する言語表現は、空間に関する表現が比喩的に（ただし比喩とは感じないほどに慣用化されて）用いられている。「過去を振り返る」と我々が言う時、「過去」が話者の背後空間に存在し、それを体の向きを回転させて認識するかのように言語化される。このように、肉体の前後左右に基づく身体的・経験的な空間（平衡）感覚が、時間感覚の元になっているわけである。

そうすると、色の知覚が極めて基本的な認知能力であるがゆえに、何らかの形で人間の概念形成や、言語と関連があるのではないか、ということが考えられる。様々な先行研究によって、色の好悪などの感情・感性との関連は解明が進んでいる。本研究では、色と概念との関連性について研究を進めている。

本年度は、ある語（概念）について直感的にどのような色が連想されるか、について調査を行った。古くはゲーテの『色彩論』にも、色がどのような意味を持つのか、ということは論じられている。ここでは、反対の方向での連想、つまり概念→色を調査した。

東京工芸大学芸術学部生で、筆者が開講している基礎教育系科目の受講者のうち、調査への参加に同意した学生を対象とし、人数は138名（年齢18～25歳、男：66名、女：72名）であった。回答者には、23色の色見本を渡しておき、口頭で話した語（例：「未来」）から連想される色を色見本から一つ直感で選んでも

らうこととした。前の回答との整合を考慮することのないよう、いくつかのジャンルの語を無作為に並べ、また、各設問の間に簡単な四則演算を行ってもらうことで、前の設問への回答が極力影響しないよう配慮した。

表2に調査結果を示す。23色を近似の基本色彩語彙の13にまとめた。それぞれの項目で統計的に有意な回答の偏りが見られている。詳細な考察は、次年度の学会発表（RaAM12, LCM8, FTL4）で行うこととしている。概要としては以下のとおりである。

- 感情については、肯定的なもの（よろこび、幸せ）が暖色系であるのに対し、否定的なもの（悲しみ）は寒色系である。ただし、怒りは「赤」が突出する。これらは、感情の身体的・生理的基盤と合致するとみられる。
- 「友情、信頼、希望」と「裏切り」についても同様に色でも対照が見られる。
- 「未来」は白と青系統が主流である。対義語である「過去」は、灰色、青系統となっている。本来、抽象概念とされるものは、抽象であるが故に「色」の認識は無いはずであるが、このように規則的な色との対応関係が観察されるということは興味深い。現在、回答者の年齢を広げて300名規模で調査を実施中である。

	白	黄	橙	赤	桃	紫	青	水	緑	黄緑	茶	灰	黒
よろこび	5	51	13	9	53	0	1	1	2	3	0	0	0
幸せ	10	12	10	4	94	1	0	5	1	0	0	0	1
怒り	2	0	1	92	1	4	1	1	4	0	27	1	4
悲しみ	2	1	0	0	4	4	79	21	3	0	2	13	8
友情	0	17	36	40	7	1	11	4	9	6	5	0	2
希望	15	79	16	8	3	0	4	7	4	2	0	0	0
信頼	10	8	20	15	19	5	9	7	30	6	4	0	2
裏切り	4	0	0	11	1	45	6	0	6	0	12	14	39
未来	37	17	8	4	9	2	16	27	5	6	1	5	1
過去	5	0	4	2	0	3	19	9	10	2	12	36	10
前	20	9	17	31	22	0	4	11	11	1	4	1	4
後ろ	1	0	0	2	1	9	26	3	12	0	17	22	45
右	3	9	9	31	8	2	15	7	25	7	17	3	1
左	4	5	3	6	8	4	23	20	41	13	7	1	1

表2 単語から連想される色調査結果